

臺灣 120 年來的日本語學研究 —1895-2015 年—

賴錦雀

東吳大學日本語文學系教授

摘要

台灣自從甲午戰爭結束之後開始了日語教育，2015 年適值 120 週年。經過了日本殖民時代、蔣家集權統治時代，進入李登輝總統時代之後，由於自由民主的時代潮流所趨，使得台灣的日語教育掙脫了嚴格的限制，展現出強盛的發展能力，日語學系相繼成立。雖然近年來由於少子女化的影響，使得一些日語學系陸續被合併或停止招生，不過，台日兩國在歷史、地理、人文各方面都有密切的關係，不論日語教育現況如何變遷，日語在台灣都具有相當的重要性，而對日本語學的研究也是不可忽略的課題。日本殖民時期，政府以日語作為培育日本皇民的工具，非常重視日語教學法。相對地日本語學研究較未被提及。1945 年太平洋戰爭終戰之後，日語成為台灣的禁忌語言，遑論研究。1963 年中國文化學院成立了戰後第一個台灣的大學日本語文學系，名稱為東方語言學系日文組，並且於 1968 年起出版『中日文化』學報，開始有了研究成果的發表園地。本論文之目的在於論述 1895 年 7 月-2015 年 4 月間，台灣有關日本語學研究的內涵及其動向，以期對今後的日本語學研究有所啟發。

關鍵詞：台灣、日本語學研究、學報、日語教育、台日交流 120 年

台湾における 120 年来の日本語学研究 —1895-2015 年—

頼錦雀

東呉大学日本語文学系教授

要旨

日清戦争後、台湾における日本語教育が始まった。2015 年はちょうど、120 周年という大きな節目に当たる。植民地時代、蔣家集権統治時代を経て李登輝總統時代になったが、自由民主という時代の風潮に乗って台湾の日本語教育が厳しい制限から解放され、戦後一番活発な教育活動が行われ、日本語文学科が次から次へと創立された。最近では少子化の影響で日本語学科で英語学科と合併されたものもあるし、募集停止になったものもあるが、台湾と日本は歴史的にも地理的にも人文的にも密接な関係にあるので、台湾にとって日本語が重要な外国語であり、日本語学研究が重要な研究領域である。日本統治時代、植民地政府は日本語教育を皇民化の道具にして、日本語教授法をかなり重視したが、日本語学研究のことはあまり研究成果が発表されなかった。1945 年太平洋戦争終戦後、日本語は台湾において禁止される外国語になったので、研究がされないことはいうまでもなかった。1963 年に中國文化學院で「東方語言學系日文組」という台湾初の日本語文學系が創立され、1968 年に紀要『中日文化』が創刊されたので研究成果の発表の場が提供されるようになった。本稿では文献分析法で客観的に 1895-2015 年における台湾の日本語学研究の内容を明らかにし、その動向を報告して今後の参考にしたものである。

キーワード：台湾、日本語学研究、学報、日本語教育、120 年

The trend of Japanese science study in Taiwan : 1895-2015

Lai, Jiin- chiueh

Professor, Soochow University, Taiwan

Abstract

Japanese education in Taiwan began in 1895, and 2015 is the 120th anniversary. Taiwan after the Japanese colonial era and the reign of authoritarian Chiang, entered the era of President Lee Teng-hui. Since the atmosphere of freedom and democracy, Japanese Education in Taiwan break the strict limits, growing. In recent years, due to the low birth rate, making some Japanese Department were merged or stopped enrollment. However, Taiwan and Japan in history, geography, humanities are closely related, the Japanese in Taiwan is an important foreign language, Japanese studies is also one of the important academic fields. Japanese colonial period, the Japanese government attaches great importance to teaching, but Japanese science study wasn't done so much. 1945-1963, the Japanese are prohibited, so there is no Japanese study. 1963 Japanese group of China Culture University was established, and "Chinese culture and Japanese culture" was published in 1968. And more and more academic results are published. The purpose of this paper is to discuss Japanese science study in these 120 years in Taiwan.

Key words: Taiwan, Japanese Studies, journal, Japanese education,
120 years' Japan-Taiwan Exchange.

台湾における 120 年来の日本語学研究 —1895-2015 年—

頼錦雀

東呉大学日本語文学系教授

1. はじめに

日清戦争後、台湾において日本語教育が始まった。植民地時代、蔣家集権統治時代を経て李登輝總統時代になってから、自由民主という時代の風潮に乗って台湾における日本語教育が厳しい制限から解放され、戦後一番活発な教育活動が行われ、日本語文学科が次から次へと創立された。日本語教育の実施とともに日本語学研究が行われてきた。最近、少子化の影響で日本語学科で英語学科と合併されたものもあるし、募集停止になったものもあるにもかかわらず、日本語学研究はますます盛んになっている。

1945-2015 年における台湾の日本語学研究を概観してみると、次のようなことが分かる。日本統治時代、植民地政府は日本語教育を皇民化の道具にして、日本語教授法をかなり重視している¹が、日本語学研究のことはあまり成果が発表されなかった。1945 年太平洋戦争終戦後、日本語は台湾において禁止される外国語になったので、研究がされないことはいうまでもなかった。それが 1965 年ごろから日本語学の研究成果が発表されるようになった。高明誠 1965「中日語文的比較研究」『台灣教育』（台灣省教育會）がその例である。中國文化學院は 1963 年に戦後、台湾初の日本語関係学科を創立したが、その名前は東方語言學系日文組だった。1968 年に紀要『中日文化』が創刊され、研究成果の発表の場が提供されるようになった。その後、淡江文理學院、輔仁大學、東呉大學にそれぞれ「東方語言」という名の日本語文学系、組が設置され、それぞれ『東方語・文學』、『淡江日本論叢』、『日本語日本文學』、『東呉日本語教育』という刊行物が発行されて、台湾の日本語学研究の新しい扉が開かれた。20 世紀の末葉、日本語関係学会が設置され、それぞれ学会誌が発行されている。それも日本語学研究の成果を発表し、意見交換をする重要な場になっている。

2015 年はちょうど太平洋戦争終戦 70 年、台湾における日本語教

¹ 台湾という植民地の日本語、日本語教育について蔡（2003）のほかに安田（2000）（2011）を参照されたい。

育実施 120 年という大きな節目に当たる年であるので、1895 年から本日までの台湾における日本語学の研究動向を明らかにすることが重要である。本稿では日本語学科紀要と学会紀要における台湾の日本語学の研究動向を考察した結果を報告する。

考察にあたり、時代による台湾における日本語学の研究動向を明らかにすることが主な目的なので、日本統治時代の「國語教授研究會」「國語研究會」「台灣教育會」の刊行物『國語研究會會報』『台灣教育會雜誌』『台灣教育』『國語の臺灣』『第一教育』及び戦後、中国文化大学で 1965 年に創刊された『中日文化』、淡江大学で 1991 年に創刊された『淡江日本論叢』、輔仁大学で 1973 年に創刊された『日本語・日本文学』、東呉大学で 1976 年に創刊された『東呉日本語教育學報』（『東呉日本語教育』改題）、銘傳大学で 1998 年に創刊された『銘傳日本語教育』、台湾大学で 2001 年に創刊された『臺大日本語文研究』、政治大学で 2004 年に創刊された『政大日本研究』などの日本語文学科紀要と 1990 年に創刊された『台灣日本語文學報』（『日本語文研究論文集』改題）、1993 年に創刊された『台灣日語教育學報』（『台灣日本語教育研究論文集』改題）の 2 種の学会紀要を対象にする。戦後の台湾における日本語教育は中国文化大学、淡江大学、輔仁大学、東呉大学の四つの私立大学に負うところが大きい。そして、銘傳大学ははじめての応用日本語学科が設置された大学であり、台湾大学と政治大学は戦後最初に日本語文学科が設置された国立大学である。以上の六大学ではそれぞれ学科紀要が発行されている。日本語関係学会においては 1989 年に創立された「台湾日本語文学会」（「日本語文研究会」改名）及び 1991 年に創立された「台湾日語教育学会」（「中華民國日語教育学会」改名）で発行されている学会誌に掲載されている論文で日本語学研究のものが少なくないので学会の代表として考察対象にした。

各紀要のそれぞれの目次を中心に考察したあと、(1)植民地時代の 1895-1945 年、(2)太平洋戦争終戦から国立台中商業専門学校に日本語を専攻する教育機関が出来た 1945-1980 年、(3)教育機関が多くなる 1981-2015 年、という三つの時期に分けて時代別における日本語学の研究動向について見てみたいものである。分析にあたり、次のような分類で台湾における日本語学研究を考察する²。

² 分類は頼（2010）を参照。考察対象の出版時間は 1895 年から 2015 年 5 月現在までにする。

- (一) 素材から見た日本語学研究：話し言葉、書き言葉
- (二) 技能別から見た日本語学研究：読解、発話、聴解、書写、翻訳・通訳
- (三) 構造別から見た日本語学研究：音声・音韻、文字・表記、語構成、語彙、文法、談話・語用、文章・文体、待遇表現、地域言語、専門日本語、文語など
- (四) 品詞別から見た日本語研究：動詞、名詞、形容詞、形容動詞、連体詞、接続詞、副詞、感動詞、助詞、助動詞など
- (五) 外国語から見た日本語研究：日中語対照研究
- (六) 言葉と運用から見た日本語研究：語用論、談話分析、言語意識、危機言語、ジェンダーなど
- (七) コンピュータリテラシーから見た日本語研究：コーパス言語学など

2. 考察一紀要別から見た台湾の日本語学研究

2.1 『國語研究會會報』『台灣教育會雜誌』『台灣教育』『國語の臺灣』『第一教育』

日本植民地時代、初めての日本語関係研究会は 1898 年（明治 31 年）に発会式が挙げられた「國語教授研究會」であった。発会式で小川尚義は音声上、言語上から国語を教授する方法について演説をした。第 2 回研究会のとき、音韻、単語、文章、文字、読み方に関する疑問を収集し会員に配布するように決められた³。1899 年（明治 32 年）1 月に「國語教授研究會」が「國語研究會」と改名され、1900 年（明治 33 年）5 月に機関誌『國語研究會會報』が刊行された。1901 年（明治 34 年）に「國語研究會」が「台灣教育會」と改称され、7 月に新しく機関紙『台灣教育會雜誌』が出されたが、1911 年（明治 44 年）に『台灣教育』と改名された⁴。

『台灣教育』の他に、『國語の臺灣』『第一教育』という雑誌も刊

³ 蔡（2003：276）による。

⁴ 蔡（2003：307）による。

行された。1923 年（大正 13 年）11 月に「臺灣子供世界社」による教育雑誌『啓南教育』が発行されたが、その後『第一教育』に改名された。創刊者は吉川精馬で、編集者は臺北師範學校附屬公學校研究會である⁵。そして 1941 年 11 月に『國語の台灣』が発行された。蔡（2003）によれば現存しているのは 1-3 号である。

『台灣教育會雜誌』『台灣教育』『國語の臺灣』『第一教育』に載っている文章は読み方指導、聴き方指導、談話指導、話し方指導、綴り方指導に関するものほかに、日本語学関係の論述も見られる。素材から見た場合、話し言葉に関する話し方、談話指導のものも書き言葉に関する仮名遣いや書き方指導、表記指導などのものも見られる。技能別から見た場合、読解、発話、聴解、綴り方、翻訳などの技能のものが見られる。

構造別から見た場合、まず音声関係の論述の多くは児童の訛音についてのものである。アクセント、連濁音、促音、拗音関係のものもみられる。表記関係のものは 28 本見られるが、仮名遣い、ローマ字、送り仮名、左横書き、語法指導における文字訓練などの問題が取り上げられた。そのうち、仮名遣いのもの（15 本）が一番多い。語彙関係のものには形容詞、形容動詞、数詞などのものが見られるが、語構成についてのものは見られなかった。助詞、助動詞は取り上げられたが、構文論関係のものはなかった。しかし、「小学校に於ける系統的語法教授に就きて」というような文法指導の話がある。文章・文体についての具体的なものはないようであるが、古典の語学的研究、江戸時代の語源論、狂言記の語法について論じたものがある。敬語の使い方に関しては敬語法の研究、「御」という語などが 5 本見られたが、待遇表現全体についての論述は見られなかった。方言や専門日本語についてのものもなかった。

品詞別から見た場合、名詞、形容詞、形容動詞、助動詞、助詞についてのものがあるが、その他の品詞は見られなかった。なお、「公

⁵ 李・傅（2007）を参照。

学校国語科に於ける対訳の可否如何」という翻訳関係の論述は3回あった。

全体的に言えば、日本植民地時代でよく取り上げられたのは音声と表記に関する課題である。多くの人が音声に関して論述を発表したが、就中、小川尚義は台湾における言語学研究の先駆といえる。但し、小川尚義が発表したものの多くは台湾の閩南語、客語、原住民語などの台湾の言語に関する研究成果である。日本語学研究といえば、「仮名遣ニ関スル調」、『國民讀本参照假名遣法』⁶が取り上げられる。小川尚義が主張した表音仮名遣は『台灣教科用書國民讀本』で用いられたものであるが、『台灣教科用書國民讀本』の「土語讀方」の部は日台語対訳に当たるものである。

2.2 『中日文化論叢』（『中日文化』改名）

戦後、台湾初の日本語関係学科の中国文化学院東方語言学系日文組は1963年に創立されたが、1968年に紀要『中日文化』が創刊された。1968－2014年に掲載された論文を考察してみれば次のようになる。

『中日文化』は素材から見た場合、話し言葉と書き言葉の両方の論述が見られる。話し言葉関係には会話教育、談話に於ける言葉の切り替え、言語行動に関するものがあり、書き言葉関係には作文、日中同形語、漢字表記語のものがある。技能別から見た場合、読解関係と聴解関係のものはないが、発話関係のものは6本ある。会話教育関係のものほかに、言語行動関係のものがある。翻訳、通訳の多くは翻訳、通訳教育のものであり、あわせて10本ある。

言語構造別においては、音声関係のものは少なくない。戦後、最初に学習者の発音問題を取り上げた論文は創刊号に載っている蔡茂豊「PTKの発音について」である。そして、漢字音について論ずるものもある。文字・表記関係は4本しかないが、4本とも漢字関係の

⁶ 近代デジタルライブラリーで検索してみれば、『國民讀本参照假名遣法』は「民政部總務局學務課」出版になっているが、「緒言」では「當時囑托小川尚義ヲシテ調査セシメタルモノナリ」とあることから小川尚義によるものと分かる。

ものである。語彙については形容動詞、動詞、副詞、外来語、オノマトペ、コロケーション、慣用句などがあり、日中同形語のものも見られるが、語構成関係のものは見られなかった。文法のものも8本あったが、テンス、否定、複文、動詞、助詞、複合助詞、形式名詞に関するものである。台湾人学習者に難しい敬語関係の論文が1本あった。

品詞別に関する論述は動詞、形容動詞、副詞、助詞「は」、複合助詞のものがある。日中語対照研究の論文は3本観察された。言葉と運用においては言外の意味、言葉の切り替え、ポライトネス、詫びと謝罪に関する論文が掲載されている。コンピュータリテラシー関係のものは見られなかった。

2.3 『淡江日本論叢』

1966年に創立された淡江大学東方語文学系は1970年5月に『東方語・文学』を創刊した。「日本語から中国語へ」(張蒼浪、1970、創刊号)、「漫談日本語的學習」(施嘉明、1970、創刊号)、「動詞の字引の引き方」(英紹唐、1973、4号)、「敬語の使い方について」(陳瑤淇、1974、5号)、「敬語の使い方」(紀慶昇、1974、5号)などの論述が見られたが、5号以降の資料は見つからなかった⁷ので、本稿では主に1991年に創刊された『淡江日本論叢』を対象に考察する。

『淡江日本論叢』において、話し言葉の論述も書き言葉の論述も見られるが、素材関係のものだとはっきり判断されるものは2本だけである。技能別に見れば作文、翻訳関係の論述はあったが、読解、聴解についてのものは見られなかった。音声関係においては音韻系統、連濁、破裂音の閩南語と日本語との比較、台湾語になった日本語のアクセントなどに関するものがある。文字・表記のものは見られなかった。語構成部門ではオノマトペの動詞形成、漢字接頭辞の「不」「無」「非」の用法、接尾辞の「～状」「～書」「～費」「～料」「～賃」「～金」「～代」及び疊語についての論述があった。

⁷ 蔡(2003)を参照。

語彙に関する論文にはオノマトペ、状態動詞、日本語の外行語（閩南語になった日本語）に関するものがあった。文法部門ではアスペクト、引用表現、動詞文、否定表現、条件文、受身表現、所有表現、授受表現、接続表現、連用修飾表現などについての論述が見られた。談話における調整行動の論述が1本、表現論の論述が3本、待遇表現のものが1本あった。そして、接続詞の歴史と機能の研究成果も1本観察された。

品詞別から見れば形容詞、副詞、動詞、接続詞、接続助詞の研究成果があるが、動詞が一番多かった。日中対照研究では動詞、引用表現、回答文についてのものが見られる。

2.4 『日本語日本文学』

1969年に創立された輔仁大学東方語文学系は1973年10月に『日本語日本文学』を創刊した。1973-2014年における掲載論文は次のように整理される。素材から見た場合、話し言葉では定型スピーチ、書き言葉では作文関係の論文があった。技能別で見た場合、通訳関係の研究成果が見られるが、外の技能のものは見られなかった。

言語構造関係のものにおいては、音韻関係の論述は1本ある。音声関係のものは5本あるが、そのうち、アクセントのものは3本だった。表記関係のものにおいては言文一致のものは1本あるほか、漢字の筆順のものは3本あった。そして、表記に見られる漢字の意味についてのものは1本あった。語構成については造語モデルの構築と形容詞の動詞化「-ガル」・「-ム」・「-マル」・「-メル」についての論文がある。語彙に関するものは台湾語になった日本語、中国語と対応する漢語のものである。文法関係の論述はアスペクト、「のだ」、文型、自他動詞、使役、時制、連体修飾の「の」と「が」の使い分け、「愛しない」と「愛さない」の揺れについてのものである。談話構造については通訳に関するものの1本であった。文体、表現に関しては小説に於ける男性作家と女性作家の文体差及びことわざの研究成果がある。そして、待遇表現の論述は2本見られる。

品詞別で見た場合、形容詞、動詞、助動詞、助詞のものが見られ

るが、動詞関係は延べ4本あった。コンピュータリテラシーについての論述は Moodle 利用の日本語文法データベースに関する論述である。

2.5 『東呉日語教育學報』（『東呉日本語教育』改名）

1972年に創立された東呉大学東方語文学科では1976年に機関誌『東呉日本語教育』が創刊されたが、1997年に『東呉日語教育學報』に改名された。1976－2015年4月の掲載論文は次のように整理される。

素材から見た場合、話し言葉も書き言葉も関係論文が多かった。会話、通訳、リズム、対話活動などの話し言葉に関するものと作文、漢字の字形、手紙などの書き言葉のものが見られる。技能別から見た場合、読解関係の論述は見られなかった。発話関係には依頼場面、指示詞の用法、会話創作、会話指導についての論述が見られた。聴解関係では通訳訓練法から見直す聴解練習についての論文が1本あった。作文においては慰め・励ます手紙、取り立て詞の習得、作文指導に関するものが見られる。翻訳・通訳関係では翻訳における色彩語、接尾字「的」の問題、変化表現の日中両語対応、文学作品の翻訳問題、翻訳理論、誤訳などが観察された。

構造別から見た場合、音声・音韻では中国語との韻律、韻尾などの対照研究、漢字音、アクセント、長音、ポーズ、母音無性化などの論文が掲載されている。文字・表記においては文字全体、漢字、あてじ、漢字の訓、漢字教育について論じられた。語構成関係のものには「不、無、非、未」などの接頭辞、形容詞に付く「さ、み、げ」などの接尾辞、複合形容詞の形態、「的」、動詞連用形による造語、語形成論、『和名抄』の和名の語構成などのものがある。

語彙については代名詞、形容詞、動詞、感動詞、挨拶語、疊語、類義語、数量詞、基本語彙、オノマトペ、人名、慣用句、ことわざ、日中語対照研究、日中語同形語、借用語の論述が見られる。文法に関する論文には動詞識別法、アスペクト、「ている」、「である」、「ておく」、「た」、「のに」「ために」「ので」の関係、類似表現、受身

動詞、指示詞、結合価、文型、テ節、取り立て、疑問表現、可能表現、形容詞文、変化の表現、否定表現、従属節、条件文、省略、構文分析、題述文、接続詞使用、連体複合辞「という」などのものがあった。文体については文の接続のしかた、論説文の構造などのものが見られる。待遇表現では日本語教科書における人間関係と敬語の呼応関係についてのものが1本あった。専門日本語では日本語文学科専門日本語教育の位置付け、ビジネス日本語会話、専門日本語教育における語彙指導の論述が見られる。

品詞別から見た場合、動詞と補助動詞をあわせて16本、形容詞は12本、接続詞、副詞、感動詞はそれぞれ1本、助詞は7本ある。日中対照研究の論述には韻律、音韻、漢字音、発音表記、慣用句、漢字の字形、同形語、身体語彙、接辞「無」、「～化」、「錦」の意味用法、温度形容詞、色彩語、語順、テンス、アスペクト、ムード、類似表現、受身表現、使役表現、発話語「でも」などの論述が観察された。言葉と運用から見た場合、省略、対比、慰め・謝罪・依頼などの言語行動、コミュニケーション能力育成に関するものが見られる。コンピュータリテラシーから見た日本語研究はコーパス関係のものが2本あった。

2.6 『銘傳日本語教育』

1996年に創立された銘傳大学応用日本語学科では1998年に『銘傳日本語教育』が創刊された。それに掲載されている論述は素材から見た場合、話し言葉のものも書き言葉のものもあるが、数量から見れば書き言葉の論述よりも話し言葉の論述が多い。話し言葉関係の論述においては運用能力養成、タスク達成、日本事情、会話における文法の定着確認、接続詞の使用、依頼の発話行動、相づち使用、語りの協働調整、拍感覚、高低音感、単語の音声認知、「文末表現」の男女差、談話に反映する心的距離・相対的力のあり方、会話指導に関するものが見られる。書き言葉関係の論述においては日本における文字文化の形成、新聞記事における類型的表現、専門日本語ライティング教育、日本語学習者の文章に見られる構成と論理展開、

自己 PR 文の叙述、文章構成指導、日本語アカデミック・ライティングの核心をつかむ、中上級学習者の依頼の手紙の特徴と問題点、尾括型意見文の文章構造、論説文における中点の用法と問題点に関するものがあった。

技能別から見た場合、読解、発話、聴解、書写、翻訳・通訳のものが観察された。読解においては読解プロセスとその指導法、内容スキーマと日本語能力が日本語読解に及ぼす影響、「黙読・音読併用法」と「黙読法」の視点を通して考えられる読解授業の実践と問題、聴解においてはテレビニュースによる聴解力養成、ヒヤリングテストの考察、聴解ストラテジーの使用変化、聴解要約能力の養成、発話においては教科書におけるダイアログ分析、文末表現の男女差、談話に反映する心的距離・相対的力のあり方、タスク達成のためのグループワーク、授業で実践したインタビュー活動、日本事情再認識を通しての中級会話授業の試み、談話内容の豊富性、プレゼン能力育成、会話における接続詞と接続助詞の使用、書写においては専門日本語ライティング教育、日本語学習者の文章に見られる構成と論理展開に関する問題分析、自己 PR 文の叙述、文章構成指導、アカデミック・ライティングの核心をつかむ、翻訳においては関係節の訳し方などの論述があった。

構造別的にみると、音韻・音声、語構成、語彙、文法、待遇表現、専門日本語、日本語史の関係論文が観察された。音韻・音声では高低音感、バ・マ行発音転訛、拍感覚、音声指導、破裂子音の有声性、日本語音声単語の認知に及ぼす母語の影響、日本語教育における台湾語音の活用に関する論述があった。語構成では複合動詞、「東～」、「名詞＋動詞連用形」複合語についてのものが見られる。語彙では類義語における漢語と和語、「恥ずかしい」の多義性、和語と漢語のコロケーション情報などが掲載されている。文法では原因・理由をあらわす「コトデ」、シテオク文、「連用節＋ノ」、モダリティ表現「だろう」「でしょう」、文型・文法の定着、観光日本語文型の使用頻度と機能、無題文の「が」、授受表現、関係節、格助詞表

現、原因を表す「そのため（に）」、とりたて詞「も」、否定文と係助詞「ハ」との共起関係、感情形容詞文における「カモシレナイ」・「ミタイダ」の許容度に見られる世代差、「たい／たがる」の人称現象、有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択などの論述があった。感情形容詞文における「カモシレナイ」・「ミタイダ」の許容度に見られる世代差は文体の項目に入れてもいい論述である。表現論では待遇表現のほかに、「文末表現」の男女差、談話に反映する心的距離・相対的力のあり方などが見られる。専門日本語では学習意識と「シラバス転換」、観光日本語文型の使用頻度と機能、専門日本語ライティング教育に関するものが観察された。日本語史関係のものが1本あった。今昔物語の副詞―「カク・思ハク」の用法を論じたものである。品詞別から見た場合、動詞、名詞、形容詞、副詞、助詞のものがある。

対照研究では同じ作者による論文が3本見られる。「介在性表現」、授受表現、数量計算表現の日中対照研究である。言葉と運用から見た場合、口頭運用能力向上を目指す談話指導、談話内容の豊富性の導入からのコミュニケーション重視の会話教育、談話に反映する心的距離・相対的力のあり方、「文末表現」の男女差、談話レベルでの会話教育などがある。コンピュータリテラシーのものは2本あるが、学習者言語のコーパスの構築と「日本語話し言葉コーパス(CSJ)」の「対談」場面分析を通してみる日本語母語話者の「文末表現」の男女差である。

2.7 『臺大日本語文研究』

2001年に創刊された『臺大日本語文研究』における話し言葉の論述は書き言葉の論述より多い。CALLから有声・無声破裂音指導への提案、教科書のモデル会話における「中途終了型発話」、破裂音/t/と/d/の生成、促音の発音問題、「まあ」の使用傾向、ドラマの分析を通してみる文末の「し」の意味機能、電話の会話コーパスからみた接続助詞「けど」の用法などは話し言葉の論述であり、『窓ぎわのトットちゃん』語彙データ、晶子童話における語彙の特徴は書き

言葉に関する論述である。

技能別的には発話、翻訳のものしか見られなかった。発話関係のものには発音支援システムの構築、教科書のモデル会話の分析、破裂音/t/と/d/の生成、促音の発音問題、「まあ」の使用傾向、接続助詞「けど」の用法などがあり、翻訳関係のものには通訳と記憶の関係、『窓ぎわのトットちゃん』語彙データ、翻訳文学の対照分析がある。

構造別から見た場合、文章・文体、待遇表現、地域言語、言語生活、日本語史に関するものはなく、音声・音韻、文字・表記、語構成、語彙、文法に関するものがある。発音支援システムの構築は音声関係、「～風」の意味は日中同形字音形態素のもので、表記、字音、語構成の領域に属するものである。「打ち-」、「オール」と「全」、漢語系接尾辞「的」、類義漢語接頭辞「逆-」「対-」「抗-」、翻訳混種語の語構成的な特徴、日本語形容詞と形容名詞の複合語、外来語成分を含む混種語の和語・漢語成分は語構成関係の論述である。語彙関係のものにおいて、シネクドキの分類法に対する認知意味論的考察、「騙す」を巡る類義語群、「はしる」の多義構造、動詞「つける」の表す多義性、多義語の語義配列、動詞「塗る」「運ぶ」「置く」「沸かす」の作るフレームの機能、動詞「流す」のフレーム分析、身体語彙の意味拡張、「掘る」に対する意味分析、「西～」の認知的多義構造などは認知意味論に基づいた研究成果である。ほかに「ナル」の多義構造、「ちゃんと」の意味分析、分類辞「本」、「VNをする」と「VNする」、接尾辞「-がる」、三・四級語彙表のソーラスの考察、入試科目のための日本語語彙表の開発、新漢語の中国語輸入、「曜日」に見られる日本語の時間意識、晶子童話における語彙の特徴などの語彙関係のものがある。

文法の論述では、疑問表述形式、副詞節接続形式の下位分類、目的構文「～に行く」、日本語文型、「つれる」の文法化、終助詞「もの」、補文関係を示す複合動詞、コピュラ文、とりたて詞サエの焦点と統語構造、授受動詞の名詞化、可能表現、動詞構文の限界性、

「は」と「が」の認知の相違、文末の「し」の意味機能、接続助詞「けど」の用法、「XはYが＋述語形容詞」構文における「X」の機能、「まあ」の使用傾向の分析、「てしまう」の意味機能などの論述が見られる。品詞別的には動詞、接尾辞、副詞のものがあるが、そのうち動詞のものが一番多かった。日中語対照研究のものには疑問表述形式、補文関係を示す複合動詞、同形字音形態素、造語成分としての外来語と漢語などの論文がある。コーパス関係のものは3本あった。

2.8 『政大日本研究』

2004年に創刊された『政大日本研究』の日本語学研究関係論文においては数は少ないが、話し言葉のもの(2本)も書き言葉のもの(1本)も見られる。構造別から見た場合、音声に関するものは日本語五十音表の不整合性、日本語漢字の発音ルールの2本が見られる。文字・表記関係のものは見られない。語構成関係のものには結果語と内容語編入複合語、複合動詞「～抜ける」と「～切る」と「～通す」、「V始める」と「開V」がある。語彙においては対定型句におけるコソアドの振る舞いと左右行列、「心」という言葉、「すばらしい」、「～視する」、併存する自動詞の類型、自他両用動詞「開く」「閉じる」、語彙的複合動詞の自自交替、二字漢語の「非述語形容詞」の可能性、和語の自他両用動詞、語彙と文法との関わりなどの論述があった。文法的にはテモラウ構文の統語的制約、時間副詞「すぐ(に)」と「たちまら」の構文制約及び意味分析、「トドウジニ」の意味・用法、指示詞の省略可能性、形容詞述語文の補文標識ノ・コトの使い分け、「モノ名詞＋ヲスル」構文、ヴォイスの構造、「ナル表現」の類型と意味構造、「Aーい」と「Aーくの」の名詞修飾用法の特徴、非意図的な他動詞文、思考動詞と知覚動詞の文法化現象、変化構文における「〈動名詞〉ニ／トナル」、テンス・アスペクト、補助動詞の文法化とテ形のアスペクト性、文末助詞「かな」と「かしら」の意味と機能、変化他動詞文、引用動詞と変化動詞の文法化現象などの論文が観察された。待遇表現については「いたす」、「ち

ようだい」の論述があった。文章・文体関係、地域言語、専門日本語、日本語史の論述は見られなかった。

品詞別から見た場合、代名詞、名詞、動詞、形容詞のものが観察された。日中語対照研究の成果は日漢、漢日翻訳、複合語に関するものである。語用論のものは1本あるが、統語的特性と語用論の観点からみた変化構文における「〈動名詞〉ニ／トナル」である。コーパスに対する考察結果は1本あった。

2.9 『台灣日本語文學報』(『台灣日本語文研究會論文集』改名)

1989年に創刊された『台灣日本語文學報』においては話し言葉関係の論文も書き言葉関係の論文もある。話し言葉関係のものはコーパスによる考察であるが、数は少ない。外国地名の漢字表記、外来語の表記、ビジネスEメールにおける漢字使用、会話資料における話題導入の考察、会話における発話の「重なり」、客家語に見る日本語借用語の表記、『玉勝間』の送り仮名などは書き言葉関係の論文である。

技能別では読解、発話、聴解、書写、翻訳・通訳についての論述がそれぞれあるが、発話関係のものが一番多かった。発話関係論述には談話行動、会話文作成、相づち、一人話、情報要求の発話の末尾、会話指導、のようなものが観察された。聴解関係論述には、ヒアリングテスト、CALL聴解練習用CD-ROM教材の作成、速聴と言語学習、ニュース番組を利用した聞き取り訓練、聴解とシャドーイング、聴解学習材料及び学習ストラテジー、聴解自習教材についてのものが見られるが、殆んど日本語教育関係のものである。読解関係論述にはテキスト・リーディングー二つのモデルの有効性、新たな読解授業の試み、読解授業でのピア・ラーニングの有効性、文学読解におけるピア・リーディングのもの、書写関係の論述には作文データベースから見る動詞文の誤用、「てくる」「ていく」に関する誤用、電子掲示板上の日本語作文、ピア・レスポンス活動による作文クラスでの推敲活動、作文におけるマインドマップの使用効果、作文学習動機づけにおける自己決定性のようなものが見られる。翻

訳関係論述には中文和訳の加訳・減訳現象、和文中訳の加訳・減訳、日中定型スピーチの逐次通訳、同時通訳の問題点及びその対策、通訳訓練における情報処理能力の養成、通訳の理論と実践現場、多元的台湾の「翻訳」、翻訳と文化的認知との関連性、干渉と拡張による翻訳の誤差、「文化翻訳」の角度から読む永井荷風『あめりか物語』などが観察された。

構造別から見た日本語学研究は多くの領域のものが見られる。音声・音韻関係の論述は発音全体、漢音、アクセント、母音無声化、促音及び学習者の発音問題についての論述が見られる。文字・表記においてはカタカナの五十音図、外来語の表記、ビジネスEメールにおける漢字使用、送り仮名のほかに、外国地名の漢字表記、客語への日本語外行語の表記についての論文があった。語構成については名詞の動詞化、動詞の接続詞化、形容詞の副詞化、「～風」形式、複合動詞のものが見られる。語彙関係の論文には日中語同形語、漢語、形容動詞と漢語の関係、女性を表す語彙、流行語、形容詞のコロケーション、色彩語、外来語、情態副詞習得、オノマトペ、形容詞の意味分析、シソーラス、基本語彙、語彙調査などのものがある。文法関係においてはテンス、アスペクト、ボイス、否定表現、自他動詞の弁別法、補助動詞、文法化、文型、用言の分類、条件句、結合価、文の構造、形式名詞「の」、「のだ」などの論文があった。文章・文体のような表現論関係のものにはジャンル性、新聞の表現、小説の会話文の表現と理解、引用、広告、名詞止の表現、就職要書類の表現、新聞の見出しの表現特徴、新聞報道のコンセンサスの変化、予告の機能、繰り返し表現、学習者の「ダ体発話」などがある。待遇表現では授受動詞による表現のほかに、敬語に関するものが見られる。浄瑠璃を題材とした敬語の考察結果もあった。専門日本語に関しては旅館日本語を中心とした教材の考察結果が報告されている。地域言語と日本語史に関するものは見られなかった。

品詞別から見た場合、動詞についての研究が一番多かった。形容詞のものも少なくない。但し、連体詞、感動詞についての研究成果

が見られなかった。日中語対照研究では文法、言語行動、構文論、音韻論、音声学、漢字音、語彙などに関する論述が見られる。語用論から日本語を見た論述はあいさつ、前置き、謝罪、あいづち、非難、不満、面子、ポライトネス、意見表明、調整などに関するものが見られる。現代ではコンピュータを利用して日本語学研究を行うのは多くなった。テーマでは分からなくても本当はコーパスを利用した考察結果が少なくない。コーパス利用のほかに、CALL 教育、Moodle、電子メール通信、ソーシャルネットワーキングサイトなどの道具がよく用いられている。

2.10 『台湾日語教育學報』(『台湾日本語教育論文集』改名)

1993 年 1 月 17 日に創立された台湾日語教育学会では 1994 年に学会誌『台湾日本語教育論文集』が創刊された。1995-1998 年の間、発行が停止するようになったが、1999 年になって再発行された。2014 年 12 月まで掲載された論文を考察してみると、次のように整理される。書き言葉関係のものよりも話し言葉関係のものが多かった。書き言葉関係のものには中国語から見た万葉集に於ける「所」字の用法、『和英語林集成』における漢字の表記、「大漢語林」における漢字の意味記述、読解における背景知識付与、「読む」教育の実態調査などが見られるが、話し言葉関係のものには複合名詞のアクセント法則、会話における「で(それで)」と「だから」の意味・機能、物語を開始／終了するための聞き手の言語行動、雑談における「繰り返し発話」の役割、「思い出話」における談話分析、あいさつ行動、第二人称「あなた」の指導、破裂音教授法、ポーズの問題、インタビューーに見られるフィードバックの言語行動、接続助詞「が／けど」類の機能、接続表現の運用、談話マーカー「こう」の使用傾向、促音の知覚、漢字の促音化、音韻特徴の可視化、発話目的カテゴリー、依頼表現、情報陳述の発話構造と表現特徴、音声転訛形の使用状況、聴解教育における音声合成利用の実践とその効果などがある。

技能別から見た場合、読解、発話、聴解、書写、翻訳に関する論

述が見られる。読解関係には読解における背景知識付与に関するものと「読む」教育の実態調査研究が見られる。上述した話し言葉関係のものの多くは発話関係のものである。聴覚関係においては促音の知覚研究、聴解教育における音声合成利用の実践とその効果に関するものがあった。書写関係のものは作文教育に関するものである。そして、「中日語口訳」教学の研究報告があった。

構造別から見た場合、音声・音韻関係論述では音声転訛、アクセント、破裂音、発音記号、促音に関するものがあった。文字・表記については漢字関係のものが3本あった。語構成関係論述では複合動詞と複合名詞、派生形容詞「動詞＋しい」、「一ぶる」、「～かける」と「～かかる」、色彩形容詞による語形成、味覚形容詞による語形成、感情形容詞連用形用法、外来語造語成分、「他動詞＋上げる」と「他動詞＋上がる」、感情を表す連用形名詞の「名詞性の度合い」、「他＋自」複合動詞の派生条件、日・中同形の漢語系接頭辞「反」、「名詞する」の意味タイプと構文条件、派生形容詞の語形成などが見られる。

語彙については意味関係のもの、二字日中同形語関係のもの、そして「塩」字考が見られた。文法については文型、モダリティ、接続表現、否定表現、使役表現、受身表現、テ節などについての論述があった。待遇表現のものは授受表現と敬語関係の論述である。専門日本語ではビジネス日本語のものと専門分野教育の考察が見られた。地域言語、文章・文体の表現論、日本語史に関するものは観察されなかった。

品詞別から見た場合、動詞、形容詞、名詞、副詞、接続詞、助詞、助動詞の論述があった。日中語対照研究の論述では変化、程度、モダリティの表現の他に、身体部位詞、連語のものがみられる。語用関係においてはテレビドラマを利用した待遇表現教育、敬語の口頭運用力の向上におけるシャドーイングの練習効果、ビジネス日本語教科書における敬語表現の選択基準、敬語表現の指導法などが見られる。コーパスを利用した学習支援システムのものもあった。

3. 分析一時代区分から見た台湾における日本語学の研究動向

台湾における日本語学研究の多くは日本語教育を支援するものと思われるので、本節では 1895-1945 年の植民地日本語教育時代、1945 年の太平洋戦争終戦から国立台中商業専門学校に日本語を専攻する教育機関が出来た 1980 年までの私立大学日本語教育時代及び 1981 年から現在までの日本語教育開放時代に区分して、それぞれの時代における台湾の日本語学研究の特徴を明らかにしたい。

日本植民地時代(1895—1945 年)の『國語研究會會報』『台灣教育會雜誌』『台灣教育』『國語の臺灣』『第一教育』を考察した結果、日本語学研究の論述が 87 本観察された。今から見れば貧弱に見られるが、教育、教科書編纂に関係した仮名遣いと発音についての論述が多かった。

1945-1980 年の私立大学日本語教育時代の『中日文化』『東方語・文学』『日本語日本文学』『東呉日本語教育』を考察した結果、日本語学研究は 30 本あった。音声、漢字、文法、慣用句、敬語、動詞、言語、日本語教育についてのものであるが、音声関係の論述が一番多い。

1981-2015 年の日本語教育開放時代の学科誌『中日文化論叢』『淡江日本論叢』『日本語日本文学』『東呉日本語教育』『銘傳日本語教育』『臺大日本語文研究』『政大日本研究』及び学会誌『台灣日本語文学報』『台灣日語教育學報』を考察した結果によると、日本語学研究は合わせて 904 本（異なり論文数）ある。類型別で見ると、日本語構造関係は 568 本（56.86%）、品詞関係は 148 本（14.81%）、技能関係は 137 本（13.71%）、対照研究関係は 77 本（7.71%）、素材関係は 39 本（3.90%）、コンピュータリテラシー関係は 25 本（2.50%）、文語関係は 5 本（0.5%）ある。日本語構造関係で多く取り上げられたのは文法（230 本、全体の 23.02%）である。次いで語彙研究（106 本、全体の 10.61%）がよく研究課題にされた。語彙と語構成（55 本、全体の 5.47%）はあわせて 161 本あり、全体の 16.12%を占めている。それを文法と合わせれば 391 本になり、全体の 39.14%を

占めている。音声関係は 54 本 (5.41%) あるが、文法関係の四分の一に過ぎない。現代において日本語研究者の関心の的は昔の音声ではなく、文法であることが分かった。対照研究 (77 本、全体の 7.71%) もかなり重要視されている。これを技能別の翻訳・通訳 (51 本、全体の 5.11%) とあわせて考えてみると、日本語学研究において台湾の生活言語、特に国語である中国語のことが考慮に入れられていることが分かる (次節の表を参照されたい)。

4. まとめ

以上考察・分析した結果を次のようにまとめて本稿の終わりにしたい。

- (1) 台湾において日本語教育が実施された最初から日本語学研究が始められた。
- (2) 日本統治時代の研究は日本語の音声、表記が主なものであったが、日本語と台湾の言語の対照研究は重視された。
- (3) 太平洋戦争終戦の 1945 年から国立専門学校で日本語組が設置される 1980 年まで日本語学研究の数はあまり多くなかった。研究課題は音声関係のものに集中している。
- (4) 1980 年に東呉大学日本文化研究所が設置されてから『東呉日本語教育』における掲載論文で日本語学研究のものが増えた。
- (5) 1989 年に台湾日本語文学会学会誌『台灣日本語文學報』(『日本語文研究論文集』より改名)、1993 年に台湾日語教育学会学会誌『台灣日語教育學報』(『台湾日本語教育研究論文集』より改題) が創刊され、会員による投稿が盛んになり、日本語学研究関係の論述が大幅に増えたことが浮き彫りになっている。台中商業専門学校応用外国語科が設置され、日本語が専攻科目にされた 1980 年から国立台湾大学日本語文学科が設置された 1994 年までににおける日本語学の紀要論文は 159 本 (1 年に平均 10.6 本)、1995 年から大葉大学、立德大学、育達商業技術學院、致遠管理學院、修平技術學院、屏東商業技術學院、興國管理學院に応用日本語学科、銘傳大學に応用日本語学科修士課程が創

立された 2000 年までにおける日本語学の紀要論文は 139 本（1 年に平均 23.17 本）、2001-2015 年における紀要論文は 606 本（1 年に 40.4 本）ある。学校評価、教師評価が投稿の動機の一つだと考えられる。

(6) 各紀要がすべて発行されている 2004—2014 年における日本語学研究関係論文の異なり数は『中日文化』16、『淡江日本論叢』は 10、『日本語・日本文学』は 14、『東呉日本語教育』は 52、『銘傳日本語教育』は 65、『臺大日本語文研究』は 51、『政大日本研究』は 45、『台灣日本語文学報』は 156、『台灣日語教育學報』は 90 である。『中日文化論叢』『淡江日本論叢』『日本語日本文学』を除いた学科紀要はすでに掲載本数では特色の区別がつかないようである。公開募集がその主な理由だと思われる。

(7) 全体的見れば台湾における日本語学の研究課題が偏っている。素材的には書き言葉より話し言葉が多い。技能別的には読解、聴解関係のものは翻訳・通訳、発話、書写より注意されていない。言語構造においては文法、語彙に偏っている。品詞的には形容詞、動詞、助詞が外の品詞より注目されている。日中語対照研究はよく行われている。文語や日本語史の研究は比例がかなり低い。科学技術の進歩によるコンピュータの発達及び研究者のコンピュータリテラシーの向上によって、コーパスやソーシャルメディアによる研究が多くなった。

上述したことに基づき、今後の課題として次のようなことがまとめられる。

(イ) 認知科学の重視：言語形式だけではなく、表現者が重視される認知日本語学の研究がもっとされるべきである。

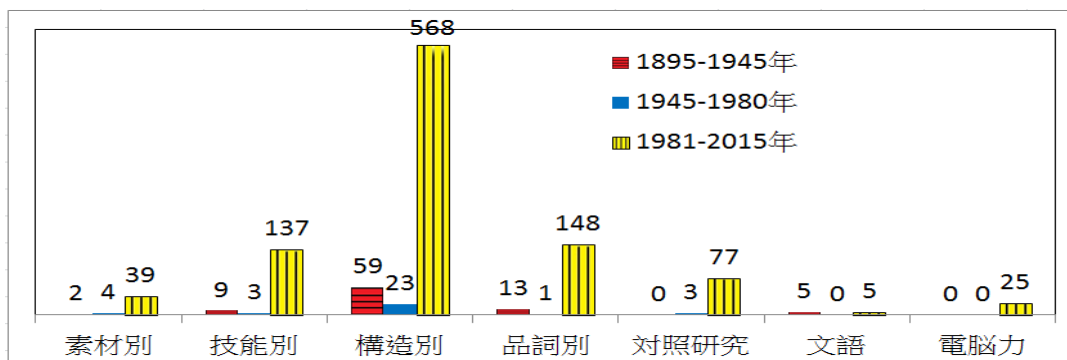
(ロ) コンピュータリテラシーの向上：場所と時間に制限されないコンピューターやソーシャルメディアを生かす日本語コーパスを利用した日本語学はもっと研究が待たれる。

(ハ) 国際化及び本土化意識の向上：グローバル時代の日本語学研究はただ目標言語の日本語だけではなく、本土化の視野を入

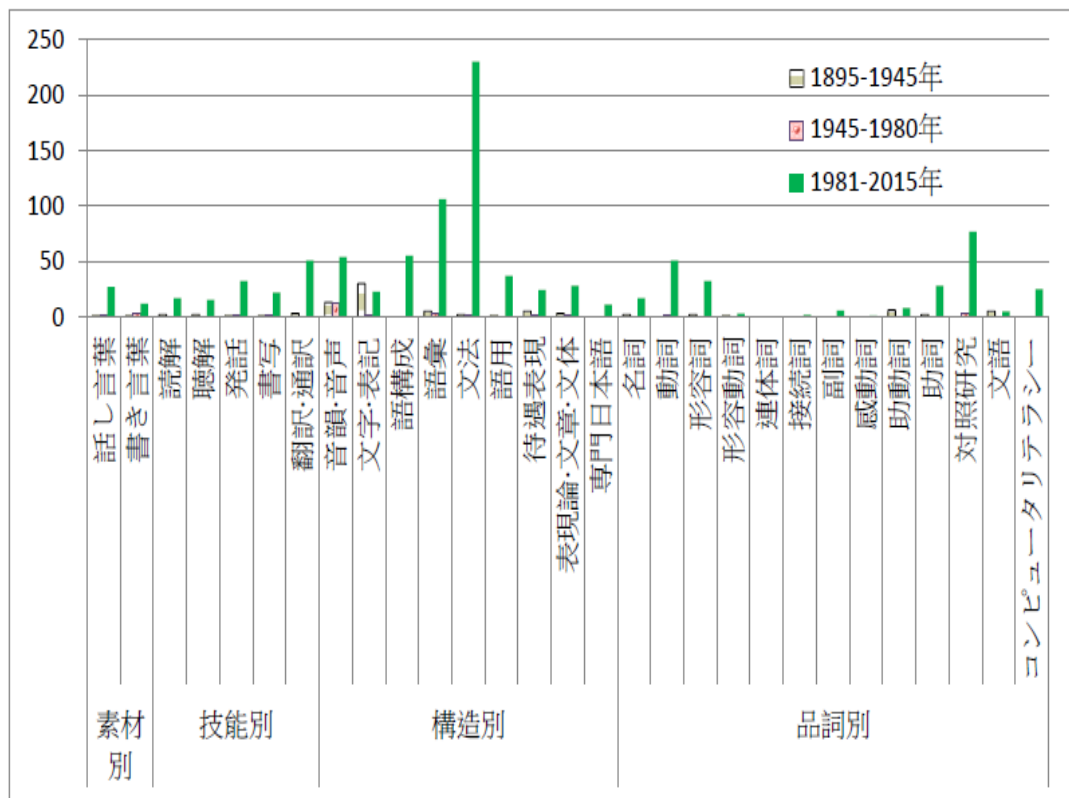
れた日本語学研究、対照日本語学研究も重要である。

(表 1) 紀要から見た台湾における 1895－2015 年の日本語学研究

| | | 1895-1945 年 | 1945-1980 年 | 1981-2015 年 | 合計 | |
|-----------------|-------|----------------|----------------|----------------|-----------|-------|
| | | | | | 延べ 論文数 | % |
| 素材別 | 話し言葉 | 1 | 1 | 27 | 29 | 2.59 |
| | 書き言葉 | 1 | 3 | 12 | 16 | 1.43 |
| 技能別 | 読解 | 2 | 0 | 17 | 19 | 1.69 |
| | 聴解 | 2 | 0 | 15 | 17 | 1.52 |
| | 発話 | 1 | 1 | 32 | 34 | 3.03 |
| | 書写 | 1 | 2 | 22 | 25 | 2.23 |
| | 翻訳・通訳 | 3 | 0 | 51 | 54 | 4.82 |
| 構造別 | 音韻・音声 | 13 | 12 | 54 | 79 | 7.05 |
| | 文字・表記 | 30 | 2 | 23 | 55 | 4.91 |
| | 語構成 | 0 | 0 | 55 | 55 | 4.91 |
| | 語彙 | 5 | 3 | 106 | 114 | 10.17 |
| | 文法 | 2 | 2 | 230 | 234 | 20.87 |
| | 語用 | 1 | 0 | 37 | 38 | 3.39 |
| | 待遇表現 | 5 | 2 | 24 | 31 | 2.77 |
| | 表現論 | 3 | 2 | 28 | 33 | 2.94 |
| | 文章・文体 | 0 | 0 | 11 | 11 | 0.98 |
| 品詞別 | 名詞 | 2 | 0 | 17 | 19 | 1.69 |
| | 動詞 | 0 | 1 | 51 | 52 | 4.64 |
| | 形容詞 | 2 | 0 | 32 | 34 | 3.03 |
| | 形容動詞 | 1 | 0 | 3 | 4 | 0.36 |
| | 連体詞 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 接続詞 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0.18 |
| | 副詞 | 0 | 0 | 6 | 6 | 0.54 |
| | 感動詞 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0.09 |
| | 助動詞 | 6 | 0 | 8 | 14 | 1.25 |
| | 助詞 | 2 | 0 | 28 | 30 | 2.68 |
| 対照研究 | | 0 | 3 | 77 | 80 | 7.14 |
| 文語 | | 5 | 0 | 5 | 10 | 0.89 |
| コンピュータリ テラシー | | 0 | 0 | 25 | 25 | 2.23 |
| 延べ論文数 | | 88 | 34 | 999 | 1121 | 100 |
| 異なり論文数 | | 87 | 30 | 904 | 1021 | — |



(図 1) 類別から見た台湾における 1895-2015 年の日本語学研究 (1)



(図 2) 類別から見た台湾における 1895-2015 年の日本語学研究 (2)

考察資料

中國文化大學『中日文化』(1965-2014 年)

淡江文理學院『東方語・文学』(1970 年-1974)

淡江大學『淡江日本論叢』(1991-2014 年)

輔仁大學『日本語・日本語文学』(1973-2014 年)

東吳大學『東吳日本語教育學報』(『東吳日本語教育』改名)
(1976-2015 年)

銘傳大學『銘傳日本語教育』(1998-2014 年)

台灣大學『臺大日本語文』(2000-2014 年)

政治大學『政大日本研究』（2004-2015 年）

台灣日本語文學會『台灣日本語文學報』

（『日本語文研究論文集』改名）（1990-2014 年）

台灣日語教育學會『台灣日語教育學報』

（『台灣日本語教育論文集』改名）（1993-2014 年）

参考文献

蔡茂豊『台湾日本語教育の史的研究(上)』台北：大新書局、2003

中田敏夫「『台湾教科用書国民読本』『土語読本』の部の日本語訳」

『愛知教育大学研究報告』48（人文・社会科学編） 愛知：愛知大学、1999

安田敏朗『近代日本語史』東京：三元社、2000

安田敏朗『かれらの日本語 台湾「残留」日本語論』東京：人文書院、2011

頼錦雀「2010 年度世界日本語教育大会総括—日本語学研究を中心に」『台灣日語教育學報』15、台中：台灣日語教育學會、2010

林初梅編『小川尚義論文集[復刻版]：日本統治時代における台湾諸言語研究』東京：三元社、2012

李佳卉、傅欣奕「《第一教育》雜誌(1924-1935)題解」『臺灣學研究』第8期、台北：国立台湾図書館、2007

後記：

本稿は 2013-2016 年度科技部より助成金を仰いだ研究計画「認知意味論から見た日本語形容詞の語形成」（研究番号：NSC102-2410-H-031-017-MY3）の成果の一部である。2015 年 5 月 8 日に渥美国際交流財団関口グローバル研究会、国立台湾大学日本研究センター、国立大学日本語文学科主催「第五回台日アジア未来フォーラム 日本研究から見た日台交流 120 年」における口頭発表稿「120 年来の台湾における日本語学研究」を加筆したものである。主催者のご厚意および有意義なご助言をくださった査読者に謝意を表したい。

